

誘
識
燈

廣
津
和
郎
著

廣 津 和 郎



朝 日 新 聞 社

燈蛾誘

昭和三十年五月二十日 一版発行

定価二八〇円

著者 廣津和郎

発行者 杉山胤太郎

印刷者 井上信明

発行所

東京都丸の内
区小塚
大塚
小倉
名古
古屋
市
広小
路

朝日新聞社

印刷・大同印刷株式会社

誘

蛾

燈

廣

津

和

郎

装
幀
•
生
沢
朗

「甚だ突然ですが、ママが結婚しなさいといふので、結婚することにしました。自分でも意外な出来事です。いろいろ考へても解らないので、思ひ切つてやつて見る事にしました。結婚生活がどういふものであるか、いつか御報告する事もあるでせう。それは先の事にして、そのお別れ、といふと何のお別れか少し曖昧ですが、これからはこの家に皆さんに集まつて頂くといふ機会も自然なくなりますから、此処での最後の集まりのつもりで、来る土曜日の夕方からは是非々々枉げてお集まり願ひたいと思ひます」

駒井愛子からかういふ手紙を貰つた女大学生の小森田みち子は、アルバイトに勤めてゐる日比谷の弁護士事務所の歸りに、牛込加賀町の高台にある昔の級友の家を訪ねて行つた。

集まつたのはみち子の外には、久我みどり、大塚さき子、春日タマ子、吉葉幸枝。この中で吉葉幸枝は女学校を出ると直ぐ結婚して、今は子供まであるが、他はみな未婚であつた。

二十畳敷き程の洋風の家族部屋、かたはらにピアノと電蓄、絨毯、硝子戸の外にはベランダがあり、その先には広い芝生の庭が見える。此処は日頃から級友達の集まつたところなので、愛子

が嫁に行けば、もうこの部屋に集まる事もなくなると思ふと、誰の心にも一抹の哀惜の念が湧くのであつた。

右の手紙の文句でも想像されるやうに、愛子は母の手で我儘いつぱいに育てられた朗かな娘で、思つた事を遠慮もなくズバリズバリ云ふ代りに、少しも毒がないので、皆から親しまれてゐた。日頃は独身論者で、「アプレゲールの若者なんぞ、をかしくて」と云つてゐただけに、どう發心して急に結婚する氣になつたのかと、友達たちは好奇の眼を光らせてゐたが、本人に会つて見ると、思ひの外乗氣で、級友達を前に置き、自分から立上つて一場の挨拶を述べたものである。

「ママが探して来て呉れました。ママが見合に行けといふので行つて見ると、まんざらでもないであります。もつともそれは外形だけで、中身がどういふものかは解らないのでありますが、この辺で一応落著いて見ようと思つたのであります」

「ヒヤヒヤ」と誰かが云つた。みんなはどつと笑ひ崩れた。

「まあ、この子はあきれた子だよ、わたしが皆さんに云はうと思ふ事を、自分でみんな云つてしまつて」と愛子のママは眼を円くしたが、併し嬉しさうであり、満足さうであつた。

料理はママが眞員の神田の中華料理からコックが出張して作り、娘たちにもこれなら飲めるだらうといつて老酒ヲオウが副へられたので、娘たちはそれを飲んで、はしやいで、大いに喋つた。

「ねえ、どんなもの、結婚て。……教へてよ」と愛子はこの中で唯一の既婚者である幸枝に向つて訊いた。

「うふふふ。今に解るわよ」

「愉快なもの？」

「さうね、愉快も不愉快もないわね。そんな事を考へる暇のないものね。——子供が出来る、もう子供でいつぱいよ」

「そんなもの。つまらないものね」

「ふん。……つまるもつまらないも、そんな事を云つてゐる暇のないものよ」

「そんなものか知ら」

「まあ、そんなものよ」

幸枝はくすぐつたさうに笑つてゐた。他の娘たちのやうに冴え冴えした顔色でなく、多少黄味を帯びたやうにむくんでゐるのは、或はもう第二の子供がお腹に宿つてゐる兆候かも知れなかつた。さう豊かでもない家に生まれ、平凡な結婚をしたらしい彼女は、何処かに世帯じみた煤けた感じを持つてゐた。

大塚さき子は芸術大学のピアノ科に通つてゐるが、友達のために「結婚行進曲」を弾いた。それから愛子の弟の高校に行つてゐる勇が記念写真を取るといつて、愛子を真ん中にして写真を取つたが、その写真にはママも加はつた。まだ少年ながらに、一人前の写真屋のやうにフラッシュを焚き、何でもカメラも相当いいカメラであるやうであるが、さういふ道楽にも自由に金を使はせてゐるところが、この一家の豊かさを思はせた。

歸りに級友達はつれ立つて駒井家を出た。晩春の夜で、潤ひを帯びた空氣が若い人達の心を少し感傷的にしてゐた。それに友達の結婚といふ事が彼女等の感情には更に一つの刺激であつた。

「たうとう愛子も結婚するのね」と久我みどりが云つた。「少々他愛もなくと云ひたいところもあるわね。あの人こそ素晴らしい恋愛でもするかと思つてゐたのに……」

「まづまづ無難に納まり申候といふところよ。まあお目出度いといふのがわたし達のエチケットよ」と春日タマ子が引取つて笑ひながら云つた。

五人は神楽坂の喫茶店で珈琲を飲み、それから坂下で都電に乗る者と国電に乗る者との二手に別れた。小森田みち子は国電組なので、大塚さき子と吉葉幸枝と三人で飯田橋駅に入つて行つた。そして又プラットホームで、お茶の水に行くさき子と別れて、みち子と幸枝とは中野行きに乗つた。さき子の乗る電車よりも二人の乗る電車の方が先に來たのである。

併し早く結婚し、早く世帯じみてしまつた幸枝とは、みち子は肩を並べて腰を下ろしても殆んど話題がなかつた。

「お子さんは幾つ？」などと訊いて見る興味はみち子にはなかつたし、又さういふ事を社交的にも云つて見るやうな性質を彼女は持合はしてゐなかつた。

そこで黙つてゐると、寧ろ幸枝の方からお世辞を云つた。

「好いわねえ、あんたなんかいつまでも自由で、學問をしていらつしやれて。わたしも大学に行きたかつたわ。早く結婚なんかしてしまふと、女はもう駄目ね」

さつき愛子の質問ににやにや笑つてゐた時とは全然違つた調子である。さつきは結婚生活もまんざらではないといふやうに、愛子に対して少々先輩ぶつた思はせぶりの態度を執つてゐたのに、今はみち子に対して、早く結婚してしまつた事を卑下したやうな事を云ふ。もつともそれは何もほん気で卑下してゐるのではなく、儀礼的にそんな事を云つてゐるのかも知れないので、み

ち子もお座なりに答へた。

「どつちが好いか解りやしない事よ。大学なんて云つたつて、どれだけの學問が出来るのだから……」

併し儀礼的に答へたつもりが、口に出して見ると、みち子に取つては相当実感を持つた言葉になつた。大学に入つた最初こそ毎日講義にも出席出来たが、近頃は出席する余裕がなくなつて来た。といふ意味は、大学に入つてから彼女の家の没落が目立つて来たからである。

彼女は最初は世田谷の家から學校に通つてゐた。併しその家も手放さなければならぬ事になり、母は大阪にゐる兄の家に引取られて行つた。そして今みち子は兄から月に四千円宛學資の仕送りを受けてゐるが、四千円では學資どころか女一人が暮せるものではない。そこで彼女は始終いろいろアルバイトを探してやつて行かなければならぬので講義にも思ふやうには出席出来ない。――併し今さういふ事を幸枝に語らうといふ氣は起らなかった。どういふ結婚生活を送つてゐるのか、詳しくその實情は知らないが、この平凡に結婚やつれをしてしまつてゐる昔の友達とは、いつかもう共通の話題がなくなつてしまつたやうな氣がするのである。……

千駄ヶ谷で幸枝が下車してしまふと、みち子は一人になり、それから新宿まで乗つて行つて、新宿から更に京王電車に乗り換へるのであるが、彼女はそこで思ひついて、新宿の表通までちよつと出て行き、パンを買つた。自分ばかりが愛子のところで久しぶりだ榮養の沢山ある支那料理を食べた事が、彼女と一緒に暮してゐる二人の友達に対して氣の毒な氣がしたので、彼女はパンの外に思ひ切つてソーセージを奮發する事にした。このパンとソーセージをぶら下げて帰れば、凱旋將軍のやうに意氣揚々として歸れるのである。

みち子が同じH大学の同級生の二人の友だちと家を借りてゐるのは、下高井戸の駅から約十分ぐらゐの距離のところであつた。六所神社の方へ向つた道で、十時を過ぎると相当に淋しい。もつとも、晩春で空気がしつとりし、潤んだ空に何処となくほの明るさがあるので、寒い頃のやうな薄気味悪さはない。

彼女は小さく口笛を吹きながら歩き出した。

「やあ、今お帰りですか？」と後に男の声が出た。

みち子は本能的にぎよつとして立止り、警戒するやうに薄暗の中をすかさやうにして見ると、
「僕ですよ。御近所の山形ですよ」と憎えた彼女に安心を与へようとするやうに、その声は少し笑ひかけた。

「ああ、山形さんですか」

「一緒の電車のやうでしたな。淋しい道ですから一緒に行きませう」

それは彼女たちの家から尙一町ほど先にアトリエを持つてゐる洋画家であつた。血色の好い始

終にこにこしてゐる独身者で、三十をもう越してゐるであらうが、何処の流派に属してゐるのか彼女は知らなかつた。六所神社あたりを散歩すると、この画家がその辺の風景をよく写生してゐるところに出会ふ事があるが、人がどんなに後に立つても、平然として堂々とした体軀でキャンバスに向つてゐる態度は立派であつた。

いつか近所なので、みち子たちと顔見知りになつたが、会ふと、「今日は」と云つて無邪気な笑顔で挨拶するのである。

そればかりでなく、夕方になるとこの画家は、その近辺を何が嬉しいのか、如何にも楽しさうな顔をして、

「お晩になりました」と云つて会ふ人毎に挨拶しながら歩きまはるので有名であつた。それが爺さんであれ、婆さんであれ、よその女中であれ、八百屋であれ、酒屋であれ、誰にも同じ調子で「お晩になりました」と軽く頭を下げて行き過ぎるのである。「お晩になりました」は東京の「今晚は」であらうが、何処の方言であらうかとみち子は日頃から考へてゐるのであつた。

二人は並んで歩き出した。

道の左手の或屋敷の森の間から月が上り、路面はほの明るかつた。空には白い薄い雲が多少あり、それが月の面を掠めて、その光を薄暗くしたり又明るくしたりする。暑くなく寒くなく、空気の肌ざりは柔かでこの上なく快い。みち子はこの季節のこんな晩にぶつかると、たとひ生活はどんなに貧乏であつても、やつぱり生きてゐるのは楽しいといふ氣持になる。それに空地や樹立の多いこの附近は、土や草や青葉の匂ひがして、何か感覺が新鮮にさせられるやうな氣がするのである。

その土や草や青葉の匂ひにまじつて、並んで歩いて行く画家のジャンパーから、男くさい匂ひが彼女の鼻に漂つて来た。その匂ひから彼女はもう直き結婚する愛子の事を考へてゐた。愛子はいふ匂ひと朝晩一緒に暮すのであらうか。

「毎日学校ですか」と画家は訊いた。

「ええ、毎日と云つて……毎日学校に行くわけには行きません」

「ほう、それは何故ですか」

「何故つて……」と云つてみち子はちよつと言葉を切つた。この肥つた栄養の充ち足りたやうな画家には、近頃の大学生は男にしても女にしても、気楽に毎日学校に通へるやうな余裕のない事など、察しがつかないのだらうと思ふと、少し皮肉を感じて、「学校の時間を毎日きちんきちんと出てゐるやうな暇なんかないんですの」

思はず「ですの」といふ女らしい言葉が、相手が男なので口に出た事に気がつく、その事にも彼女は皮肉な苦笑を感じた。伊都子の主張で、「ですの」とか「ですわ」とか「ですのよ」とかいふ語尾は一切止めようといふ事になつてゐたので、彼女等の間ではさういふ言葉は使はなかつた。「さういふ云ひ方は、女性が男性に媚びた封建時代の名残りだから、聞くに堪へない」と伊都子は云ふのである。

「ふうむ、さうですか。そんなにお忙がしいですか。学校の外に何か研究でもされてゐるんですか」

鈍いな、この人。——とみち子は腹の中で考へながら、

「みんな学校よりもアルバイトの方が忙がしいんですよ」と画家に向つて投げつけるやうに云つ

た。

何もこの画家に向つて腹が立つわけではない。併し「学校よりもアルバイトの方が忙しい」といふ言葉の意味が腹が立つのである。そんな言葉を口にしなければならぬのが腹が立つのである。

「はあ、さうですか。なるほど、解りました」と画家は大きくうなづいたが、併しさぞ驚くらうとみち子が予想したやうには、一向驚いた様子も見せなかつた。「アルバイトつて、一体どんなアルバイトです」

「いろいろよ。でも、余り好い口はありません。わたしは今或弁護士のところへ筆耕をやつてゐます」

それは五十六七になる肥つた弁護士で、所謂三百代言上りといふ感じの男であるが、傲然と椅子に腰を下ろし顎で人に指図しながら、「我輩」といふ言葉を使ふのを、彼女は忌々しく思ひ出した。債務者の依頼は金にならないからと云つて、債権者側の仕事を主として引受け、無慈悲に金を取り立てるので、敏腕といふ評判であつた。といふよりも、敏腕として評判だと自分で吹聴してゐるのである。

日比谷から数寄屋橋の間の右手の裏側に、その近辺の新しい建築物から取りのこされたやうな古い木造の貸事務所がある。昔ヤマカン横丁と云はれたものの名残りであるが、その二階にその横田弁護士の事務所はあつた。彼は債務者たちをそこに呼びつけて始終横柄な口を利いてゐた。

「それは君、見解の相違だよ」とか「あつははは、法律は人情ぢやないよ」とかいふ彼の大声が、カーテンの裏側で筆耕をやつてゐるみち子の耳に屢々聞えて来た。

「さうですか。それで何ですか。あなたと一緒にゐられる他の方もみんなアルバイトをやつておいでですか」

「ええ、みんなやつてゐます。一人は行商、一人はパチンコ屋……」

「ほう、パチンコ屋」とこの「パチンコ屋」には興味を覺えたらしく、画家は大きな声を出した。實際「パチンコ屋」といふ言葉には何がなしに一種のユーモアがある。そのユーモアを画家が感じてゐるやうに思つたのでみち子も笑ひ出し、

「パチンコ屋つて、暢氣さうに見えて、とても忙しくつて、目のまはるやうな労働なんですつて……」

毎晩遅くへとへとに疲れて歸つて来るしげ子の顔を彼女は思ひ出した。しげ子は疲れるためか近頃は少し神経質になつていらいらしてゐた。

「さうですか。さうすると、なかなか好いアルバイトは何処にもないんですな。僕も今まで随分やりましたよ」

「あら、あなたが？」

みち子は驚きの声を上げたが、なるほど、この人は自分でもやつたから他人のアルバイトの話も聞いても驚かないのだな、と思つた。それでは何苦勞なく絵を描いてゐられる身分では、この人もなかつたのであらうか。それにしては、何とのんびりと悠揚迫らざる顔附をしてゐるのであらう。

「僕は幡ヶ谷の小さな町工場に行つたのですが、特別な技能がないので、朝から夕方まで齒車をまはしましたよ。八時間働くとホワイト一本買へました」

「まあ」

「僕は体力があるので、肉体労働は平気ですが、何しろ昼間が潰れると絵を描く時間がないのでね。僕は主として風景を描いてゐるものですから。それで止めました」

「絵はお売りになりませんの」

「絵が売れば理想的ですが、絵は売れませんな。自分では名のある連中に負けないつもりですが、名がないと売れませんよ。僕は新宿の道端に『売ります』と紙を貼つて絵を並べて見たんですが、誰も買つてくれませんでしたよ。あつははは」

その朗かな笑ひ声に、みち子も釣られて「おほほ」と笑つたが、この栄養の好きさうな男も、そんな風に貧乏なのかと思ふと、同じ種族に対する親しみを急に覚えて來た。

「でも、アトリエがあたりだから結構ね」

「あ、あれですか。あれは友達のアトリエだつたんですが、死にましてね。それで僕が借りてゐるんですよ。田舎の物持なので、僕に勝手に住まはして呉れてゐるんですよ」

併し近頃はやつと一つのアルバイトが見つかつて、暫く息が吐けるといふ事なども彼は語つた。それはアメリカの兵隊の写真から肖像を描く事であるが、註文を一手に引受けてまはして呉れるブローカーがあるので、中間で相当搾取されてゐるのであらうが、兎に角どうやら食べても行かれるし、絵も描けるといふのである。

「それで当分息はついてゐますよ。いつまで続くか解らないが、併し後の事は僕は考へない質なので、その中に又好い事があると思つてゐますよ」

「それでいらいらする事はありません？」

「ええ、まあ、ありません」

それだからこの人は夕方になると、嬉しさうにこにこして、近所を歩きまはり、会ふ人毎に「お晩になりました」などと一々挨拶して歩けるのであらう。

「さうか知ら。わたし達は時々とても腹が立つて来たり、悲しくなつて来たりするんですよ。月に一遍ぐらゐ、三人とも憂鬱になつて堪らなくなると、焼酎を買つて来て、三人でぐでんぐでんに酔つ払つてやるんですよ」

「ほう、ヤケ酒ですか」

「ええ、ヤケ酒ですよ」

「それは無駄だな。僕も焼酎を飲みますが、酔ふと愉快だから飲むんで、ヤケで酔つ払ふなんて、つまらない話ですな」

「あなたにはお解りにならないのよ」

「僕には解らないな」

「さうよ、お解りにならないのよ」

みち子は反撥したくなつた。この男には不平も不満もないのであらうか。こんな風にして、自分たちが貧乏してゐる事が不合理と思はれないのであらうか。「やつぱり鈍感なんだ、この人は」とみち子は考へたが、併し反撥してやりたいと思ひながらも、心がとげとげしくは少しもならなかつた。——何しろ氣候が好過ぎる。こんな空氣の肌ざはりでは、不機嫌にはなれない。こんな晩に道伴れになつた男に悪意などもてるものではない。

「こんな晩にはうつかりすると、側を歩いてゐる男を、無暗に好きになつてしまふかも知れない